



史跡名勝天然記念物

赤木城跡及び田平子峠刑場跡

構造および形式	平山城
築城主	藤堂高虎
着工	1588（天正16）年（推定）
竣工	1589（天正17）年（推定）
史跡名勝天然記念物	1989（平成1）年 10 月 09 日指定

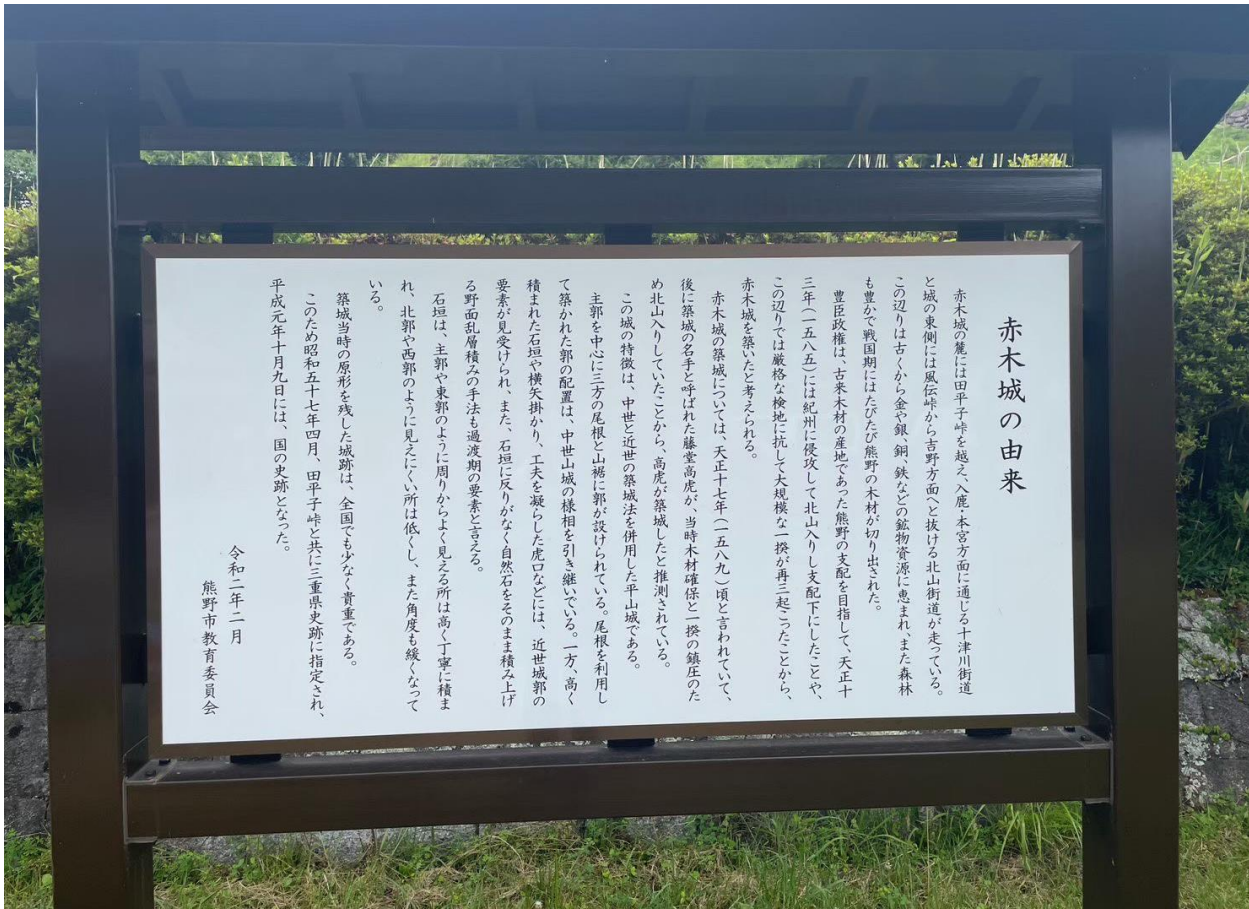
赤木城跡は熊野市紀和町赤木に所在する史跡である。奥熊野の歴史を知る重要な遺跡として、田平子峠形場跡とともに昭和五十七年に三重県史跡に指定された。そして、平成一年には城郭史上においても重要なものであるとして、史跡名勝天然記念物に指定された。築城年代について、『倉谷家文書』には『（天正十七年）丑四月五日、北山じゅうを成敗し、日暮峯平か鶴殿の川原までを成敗しその後北山押さえのため赤木村に城を築いた』と記載があり、赤木城は天正十七年に築かれたとされている。『倉谷家文書』は寛永二十年神山村の大谷九之右衛門が飯田助十郎に報告したものであり、その内容は信頼してもよいと判断したため、築城年代はこの史料をもととした。しかし、天正十七年以前に築城されたとする記録も存在し、築城年代については未だ明確に判明していないことに留意したい。

築城主は築城三名人の一人と評された藤堂高虎である。当時高虎は山奉行として、南紀地方で地元の諸領主を動員し材木の伐採や管理にあたっていた。そして、豊臣大名が新領に着任し太閤検地や刀狩りなどが進められると、高虎は紀州・熊野の検地をおこなうようになった。こうした高虎の活動の拠点となったのが赤木城だとされている。普段は熊野の材木支配の場となり、一揆が発生した際にはそれを鎮圧する前線基地となったのだ。そのため、赤木城は防衛・攻撃に優れたつくりをしている。

赤木城は平山城に分類される。平山城とは山城と平城のふたつの要素を併せ持った城のことを指し、低い山や丘陵などまわりの平地部分も城域に取り込んだつくりになっている。赤木城は、地形を利用し高い防御力を発揮する山城と、政治・経済の拠点となる平城の利点を併せ持ち、一揆の制圧基地と材木支配の場としてその力を発揮した。防衛や攻撃の工夫は地形の利用のほかにもあらゆる場所でなされている。主郭の入口である虎口は屈折をもたせた柵形虎口になっており、これが城の防衛として重要な役割を担った。また、主郭の東北隅は折りをつけた横矢掛けに、南西隅は石垣を張り出した横矢掛けになっており、城内に侵入する敵に対して側面から射撃ができるよう設計された。一方、見栄えの良さを意識して築かれた痕跡もあり、主郭や東郭といった周りからよく見える石垣は高く丁寧に、北郭や東郭といった見えづらい場所に位置する石垣は低く緩い角度で築かれた。生活や戦の場としての機能を有するだけでなく、見栄えの良さも兼ね備えた城であることがわかる。



主郭入口



赤木城の由来 説明文